

一発ネタ 仮面ライダー
ダー電王～オレ、転
生！～

行方不明

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

神様によって転生した主人公。主人公が行くのは過去か未来か……それとも？
息抜きに書いた仮面ライダー電王の一発ネタです。続きません。

目次

一発ネタ	仮面ライダー電王のオレ、転
生！	1

一発ネタ 仮面ライダー電王とオレ、転生！

拝啓 向こうの世界の皆様

現在の吾輩は光の玉である。名前はもうない。

敬具

いや、冗談ですけどね？なんでオレがこんなことになっているのかというところ……

君死んだから転生させるよ！どこがいい？

電王の世界！オレもオリジナル電王になれるようにして！凄く強い奴！

いいよ！

という噂の転生を果たしたんです！いや、実際のこととは覚えてないんだけどね？けどさ……絶対にこうなるとは思わないよね？電王になれるって言ったら良太郎やNEW電王の光太郎を思い浮かべるじゃん？確かに電王として主に戦っているのはイマジン

だったよ? 確かに最終回回りやさらば電王ではイメージが電王に単体で変身してたよ? だからと言って誰がイメージになりたいって言ったよ!? オレは人間やめるつもりはなかったんだよ! イメージになったせいでオレツエー計画がパーだよ!

おまけに契約したらデンライナー組に敵と間違われるからできないし! 契約しないと光の玉のままだから喋れないし、美味しいご飯も食べれないしでもう散々だあ! ってアレは……。

「はっ……はっは……よ……し……もう少しで新記録……。」

死にかけの主人公を発見しました。っていうか遅い。トレーニングとしてジョギングしているんだらうけどハッキリ言って遅い。やんなくても変わんないよってレベル。頑張っているなあ。

「はあ、はあ、よしなんとか新記録が出た!」

って言っている場合じゃない! この隙に憑かせてもらおう。前例があるしうまくいけばそのままにしてくれるかもしれない! 主人公一行に入れば合法的? に暴れられるし! よしそうと決まればお邪魔します! アレ? 意外に狭い……ここにやる!

「え? え? な、何?」

うぐぐ……頭(感覚的に)がつかかえて入れない……おりやああ! ど根性お!

「痛つイタタタ! ってよし! 入った! うわあすっげ! 久々の体だあ!」

『イタタタ……君誰？イマジンだよね？』

「よしよし。ん？オレ？つぶ。オレは通りすがりのイマジンだ！覚えとけ！」

よし、このネタ決まった！

『だからイマジンだよね？』

「……そうですね。イマジンです。まあ、ちよつと体貸してよ。大丈夫、大丈夫！悪いことには使わないから！多分。」

『今多分って？』

「よしレッツツゴー！」

『ちよつと待つてよく！』

やった！やった！久しぶりの体だ！さくて何を食べようかな。ラーメン？ハンバーグ？久々のご飯だあ！

「おい！お前！良太郎をどうするつもりだ！」

つてアレ？なんかうるさいなく無視無視。ワタシ、イマジン語ワーカリマセーン！イマのワタシニンゲンデスカラハハハ！

「おい！無視してんじゃねえぞ！おい！聞いてんのか！」

「うるさいなあ！久々のご飯タイムを邪魔すんな！赤鬼！」

「誰が赤鬼っておア！」

アレ?どつか消えちやった。まあいいか静かになったし。とりあえずまずはラーメンだな!レッツゴー!

「すみませーん!照り焼きハンバーガー一つ!。」

「すみませーん!DXハンバーガー一つ!。」

「すみませーん!とんこつラーメンと醤油ラーメン一つずつ!。」

「すみませーん!豚玉お好み焼きとDXお好み焼きを一つずつ!なるべく早く!。」

ふー食った、食った。なんかすごい落ちぶれた店だったな。すごいうまかったけど。

それにしても二万円分くらい食ったか?一食二万とは大変だな。良太郎。

『使ったの君だよな?それにどうして僕の名前知っているの?』

……しまった。ドジった。えーつと言い訳……言い訳……。

『ねえ、どうして?』

「ほ、ほら電王つて有名だからさ?調べたんだよ!個人的に!」

『ふーん。』

良かった。なんとかかごまかせたか?やれやれ。

「居た!アンタ!良太郎をどうするつもり?」

「おりゃ?ハナさんだ。」

「……どうして私の名前を知っているの!?!」

やべえ、またドジった。

「良太郎から聞いたんだよ。」

「つてそうだ良太郎!アンタ、良太郎をどうするつもり?まさか…リユウタみたいに

…。」

「つて、違う!違う!君達つて電王だろ?だから仲間に入れて欲しくて……。」

「……。」

「どうした?」

「怪しい。」

なんかすごい警戒されているんですけど。なんで?

「ど、どこが怪しいんだよ?」

「大体、それなら素直に言えばいいのに、わざわざ良太郎の体乗っ取っているいろいろしでかしているあたり信じられると思う?」

「……おっしゃる通りです。」

マズイ。反論できん。

「おい!お前!良太郎の体を返しやがれ!」

「あ、赤鬼。」

「誰が赤鬼だ!」

「先輩無駄だつて。先輩はどう見ても赤鬼でしょ?」

「そうそう!桃の字は赤鬼や!」

砂のバケモンがなんか増えた。いや、良太郎のイマジンスなんだけどね?アレ?リュウタロスがいない。この前公園で踊っていたからもういるはずなのに。

「つて、そんなこと言っている場合じゃねえ!行くぞお前ら!良太郎の体をかくえくしくやくがくれく!」

「あ、先輩ちよつと待って!」

「つて、ちよ、ちよつと待って!……アレ?」

三人……三匹?が突っ込んできて砂になって崩れた。アレ?なんか知らないけどオ

レが憑依している間って他のメンバーは入ってこれない？

「ちよつとあんたたち大丈夫？」

「なんでや？なんで付けないん？」

「つち！また小僧と同じパターンかよ！」

何か言っているが今のうちに説得を！ぜひオレツエー計画を再浮上させるんだ！

「待って！待って！別に悪いことしたいわけじゃないんだって！」

「なんだと？」

「オレは要するに電王になって派手に暴れたいだけなんだって！」

「……これって先輩と同じパターン？」

「じゃあなんで良太郎に憑いているのよ！」

「いや、久々に美味しいご飯が食べたくなって。」

「久々？」

「あつ……まあ、そういうこと。つい目の前に体があつたら好きにしたいくなるよね？ね？」

ハナさんはなんか胡散臭そうな顔で見ているけど他の三匹は心当たりあるのか顔を背けてる。いい加減答え聞きたいんだけどなあ。

「だからってなんで電王？普通に契約者探して暴ればいいじゃない！」

「いや、人の願い聞くのってなんかめんどくさいし。それにそうやって暴れたらあんたらに倒されそうな気がするし。」

「……………」

あつ!なんか胡散臭そうな顔から呆れて胡散臭い顔になってる!よし、ここで全力全開必殺技を!まずは一回離れて……アレなんかキツイな。グググ……

「ググ……痛い!痛い!つてアレ?」

「良太郎?元に戻ったの?」

「うん。そうみたい。でも、あのイメージは……?」

「そうだ!あのクソイマジンそこ行きやがった!」

「アレじゃないの?」

「……アレ?……」

「なんか変なふうに動いているけど……」

「いや、ちよい待ち!なんか伝わってこうへん?」

「伝わって……あ!あれって文字じゃない?」

「……文字?あ、確かに!……」

やっと気づいた!転生してからこの方暇に暇を重ねて作り出した奥義!必殺!動いて文字書く!ちなみに内容はよろしくおねがいます。まだ平仮名と簡単な漢字しか

できません。

「よ……ろ……し……く……お……ね……。」

「……が……い……し……ま……す……?」

「これって頼んでるのじゃないのかな?」

「とりあえず、デンライナーに連れて行こうか?」

「って良太郎正気か!」

「良太郎本気?」

「う、うん。なんか付いている間悪い人には見えなかったし……僕といろいろ話していたし……。」

「マジかあー!」

「やった!これでオレツエー計画スタートできる!よし次は……」

「あ、また何か動いてるよ?えーつとなになに……あ……り……が……と……う……?」

「……変な奴。」

「うん。ちよつとね。」

「なんか外野が何か言っているけどやったよ!別世界のお母さん!オレやったよ!やったー!」

すっげー!本物のデンライナーだー!

「列車なんてすっげー久しぶり!」

「久しぶり?」

「あ、いや、なんでもない。」

「それより、その羽邪魔!尻尾も!」

「うん。確かに自分自身これ鬱陶しく思った。オレってどんな姿をしてんの?」

「え?えーつと……。」

「はーい!コーヒーです!あ、私はナオミって言います!よろしくね!」

「あ、ありがとうございます。すみませんオレってどんな感じなんですか?」

「えーつとくなんというか……真っ黒なドラゴン?」

「ドラゴン?」

え?リユウタロスと被ってね?いや、龍と竜だけど。

「そういうえばそれも見えなくもないような……?」

「本当に俺はどんな姿してんの!?!」

「でも竜だとリユウタロスと被るし……。名前どうしようか?」

「被る?お前僕の真似したな!?!」

「いやいや、そんなこと良太郎に言ってくれよ！」

今まで静かにお絵かきしてたのに急に出てきたな!?

「あ!じゃあ……ドラゴンスってのはどうですか!？」

「ただスをつけたただけだよね!？」

「良いと思うよ。」

「誰か別の名前を！」

「つへ!いいいやねえか!破れコウモリには十分な名前だ！」

「黙れ赤鬼！」

「つな!誰が赤鬼だ!いいか俺は……!！」

「先輩さつきも言っただけど先輩は傍から見れば完全に鬼ですよ？」

「なんだとくこのかめこう!」

……なんかいいなこういう賑やかなの。こういうのって転生してから経験しなかったからな。

「どうしたの？」

「ん?いや、ちよつとこういう賑やかなのっていいなって思っただけ。」

「君本当にイマジン？」

「そうですよ!今の俺はイマジンですよ!？」

あ、ハナちゃんにパンチもらって二人が気絶した。いや、強いなく。それにしてもオミちゃんって煽るだけ煽って常に安全圏にいる。一番いいポジションだな。

なんかみんな笑ってスゲエ楽しそうだな。……やばい。今ちよつとだけホームシックになった。向こうの友達や父さん母さん……みんなに会いたいなあ。会ってこうやって賑やかに……。

「大丈夫？」

「なんで？」

「なんか……泣きそうな顔してたから……多分。」

「きつと気のせいさ！」

「そう……っ？」

「今度はどうした？」

「いや、ちよつと今君が人間に見えて……。」

「……ひでえなく良太郎は！イマジンだつて一応人なだけどな。」

「あ……ゴメン。」

よし。逸れた。しかし、なんかボロ出しまくりだな。オレって実はうっかり属性持ちだったのか？

「どこ行くんだ？」

「もう帰るよ。」

「そっか。んじゃまた。」

「うん。またね。」

やれやれオレも寝るかね？

「……………うるさい。」

モモタロスとキンタロスのいびきがうるさくて眠れん。他のメンバーはよく寝れるな。ってあつ！ウラタロスとリュウタロスがいない！アイツ等知っててオレを放って置きやがったな！……………少し散歩してくるか。

「しかし、時間の中なのに夜があるんだな。カテゴリーミス Steak だろ。アレ、ちよつと違うか？まあいいや。」

クリスマスとか正月もあつたしな。まあ元々子供向けの番組だからそのくらい考えてないのかもしれないけど。

「それにしても……………人間に見えた……………か……………」

時間の風景を見て、ここはオレの生まれた世界とは全然違うってハッキリとわかる。こんなものオレのいた世界にはなかった。好きな世界に来れることに浮かれて喜んで。

この世界に生まれて。生まれてみたらイマジンだったことに絶望して。

「多分…向こうの皆がオレのこと見ても…オレだって気づいてもらえないんだろうな…。
…。…オレって…人間…なのか？」

…やめやめ!こんなこと考えたって無駄だし!そうだ!今なら良太郎は寝てると
思うし少し遊ばせてもらおうかな!

「よつと…アレ?なんかあるな…ん…邪魔!よし入った。」

「ここは…なんだろ浜辺?あ、女性が倒れている。つてことはウラタロスが入ってた
のかな?まあいいや。どこに行こうかな?」

『僕眠いんだけど…。』

「…あれ良太郎起きてたの?」

『君が入るときってかなり痛いんだよ。』

「ゴメン。まあいいや、ついでに貸してよ!ちよつとどっか行ってくる!」

『ねえ?』

「なーに?」

『君はどうしてそんな辛そうなの?』

「…見間違いない?」

『そうかもしれないけどさ。君が暴れたいって言った時も、今も、なにかをこまかしてい

るように僕には見える。君に何があつたのかは知らないけど……。」

「……さい。」

『いつまでも逃げていればいいってわけじゃないと思うんだ。』

「うるさい！人のこと何も知らないくせに！黙ってる！気分悪い！もう帰る！」

『痛い！痛っ！ってあれ？ドラゴンズ？』

……気分悪い。自分で分かっていることを他人に言われるってスッゲー腹立つ。っていうか、そろそろ朝だしデンライナーの食堂でやけ食いでもするか。

「ドラゴンズ機嫌悪そうだけどうしたの？」

「分かんないです。今朝からあの調子で。」

「ゴメン。ちよつと喧嘩しちゃって……。」

「聞こえてるぞ。その人間三人組。」

「「あはは……。」」

「っは。破れコウモリが拗ねているだけだろ。」

「ダメだよ！先輩。後輩には優しくしなくちゃ。」

「なんだと？」

「桃の字やめとつけて。どうせすぐなおるやろうしな！」

「リュウタはどうかしたの？」

「あの偽物嫌い。昨日せっかく良太郎の中にいたのに追い出した。」

「ああ。アレは少し乱暴だったよねえ。」

「つておい！亀！小僧！てめえらまた勝手に良太郎に憑いたのか!？」

「……ひどい言われようだな。つていうか真面目にチャールハンを十八皿食っただけでどうしてこんなに騒がれなくちゃならんのだ。……はあ。寝不足だし、少し寝るか。」

「おりゃ？寝ちやった。」

「本当にどうしたの？」

「うん。ちよつと朝に気にしていることを言っちゃつたみたいで……。」

「放つとき良太郎。勝手に立ち直るのが男つてもんや。」

「そうそう。放っておくのが一番だよ。」

「……分かったよ。僕は一度戻るよ。姉さんと約束しているし。」

これどんな状況？いや、起きたら赤鬼がいなかった。皆なんかそわそわしているし。包帯だらけだし。

「どうなってんの？」

「あ、ドラ……今すごい強いイメージが現れて、そのイメージを追って過去に来ているの。」

「で、なんでこんな通夜みたいな空気になってんの？」

「それは……。」

「ワシらが……歯が立たんかったんや。」

「マジで!？」

「おいおい。終盤クラスの敵が出張ってきたんじゃないだろうな？あ、見えた。あくホントだ。見たことのない蠍人間みたいなイメージがソードフォームの電王圧倒してる。すげーな。あ、リユウタロスに変わった。……でも分が悪そうだなあ。」

「……ドラはいかないの？」

「なんで？」

「だって暴れたいって……。」

「確かにオレは暴れたい。でもな……自分がボロボロになるリスクを負ってまで暴れたいとは思わない。」

「……それって？」

「戦うってことはこういうことだとは知っていた。でも本当に理解していたわけじゃなかったんだ。……怖いんだよ。」

「……。」

今まで喧嘩もしたことがないような一般人だったんだ。オレはオレツエーがしたいだけで、あんな風にボロボロになるまで命懸けで戦おうとは思わない。自分が消えるかもしれないのに戦いなんて……嫌だ。

「っは。とんだ腰抜けだな。」

「なんだと?」

「そうだろ? 傷つくのが怖いから戦えないってか? そんなテメエなんか腰抜けで十分だろうが!」

「……言いたい放題言わせておけば!」

「だったら! 何か言い返してみろよ!」

「つく……。」

「できねえんだろ! 腰抜けは隅で震えてろ!」

「うわあ!」

「リュウタ! ってことは……今良太郎一人?」

「マズイ! 良太郎!」

「っち。オレが行く! つくう! いてえ!」

「先輩その怪我じゃ無茶だよ!」

「良太郎一人で戦わせる方が無茶だろうが！」

「……………」

なんでだ？なんで勝ち目がないような相手に戦い続けられるんだよ？どうして武器もないのに……………代わりに戦ってくれる相手もないのにどうして……………つち。

『良太郎聞こえるか？』

『ドラゴンズ？ゴメン後にして。』

『いいから聞け。どうしてそんなになってまで戦うんだ？良太郎は弱いし、運もない。知っているぞ？…』

『……………昔ある人が言っていたんだ。弱かったり、運がないからってそれは何もしない事のいいわけにはならない。』

『オレが聞きたいのはそういうことじゃない！死ぬかもしれないんだぞ！どうしてそんなに平然と戦える!?!』

『どうしてだろうね？分からないや。でもこれだけは言える。ここで逃げたら絶対に後悔する。だから戦うんだ。』

『……………』

「ドラゴンズ? ってうわぁ!」

「何止まってんだよ! 雑魚がア! いい加減にくたばれえ!」

……そういえば、良太郎が死ねばオレも消えるのか。流石に二度目の転生……はないか。それは……嫌だなあ。戦っても死。戦わなくても死。……転生したことを後悔たくは……ないな。っていうか、したらなんでオレが生きているのか分からなくなるな。

……大丈夫。番組では上手くいったんだ。きつとこの一度だけ。一度だけを戦えば、オレの出番は無くなる。ジークみたいなものだ。神様特別製の転生者だ。大丈夫。オレは死なない。オレは死なない。よし。行こう。

「離せっておい! 何処へ行く!」

「ちよつとだけ、腰をはめに行ってくる。」

「はあ? おい、どういう意味だ?」

「多分、先輩が腰抜けて言ったからじゃないかな?」

「え? ドラ! ちよつと待ちなさい!」

「もう出て行っちゃたけど?」

「ふん。これで終わりだ。」

「う……………」

居た居た。あ、変身解けてる。まあ、丁度いいや。馬鹿にしてたけど電王のモモタロスさん仮面ライダーの中でも好きな方でした。今だけでいいので力を貸してください。ヒッヒッフーヒッヒッフー……………よしOK。……………行くぞ！

「う、え？何って痛い！」

「何をごちやごちや言っている！死ねえ！」

「痛い……………ってあぶねっ！危ないだろうが！」

「何を今更なことを……………言ってるんだよお！」

「やっぱり怖い！って、ういか変身、変身……………どうやって？」

やばい肝心なこと忘れてた。パスは……………ある。ベルトが……………ない。詰んだね。ってういか真面目にやばい！いつまでも避けていられないし……………。

『ドラゴンス何やっているの！』

「ベルトってどう出すの!?ってういか、助けに来て難だけど助けて！」

『ええ!?ベルトは念じれば出るよ！早く！』

「死ぬー！絶対に死ぬー！」

ベルト出ろーベルト出ろー出た！アレ？なんか基本の電王ベルトと違う。……まあいいや、当たって砕けろだ！腰に付けて……あぶねっ！今掠った！

「よし、行くぞ。変身！」

《Dragon Form》

「オレ！参上！」

「つちまた変わりやがって……！」

初変身はこんな状況だけど興奮した。でもさ、窓に映った姿を見たけど……ウイザードのオールドラゴンに近いつて言えばいいのか……電王のガンフォームとオールドラゴンを掛け合わせて黒くしたつていうか……ぶっちゃけると中途半端臭が凄いです。

「グアアアアアアアアア！」

「ぐ……っは。そんなこけおどしにビビるわけないだろう！」

おおすっげ。ちよつとできるかな？と思つて鳴いたらそこら中の窓割れたし、敵が吹っ飛んだ。お？爪や羽、尻尾も伸びる。よし、相手が来るのに合わせてっ！

「ドラゴンテール！モドキだけど！」

「グアア………いい加減にしろ！」

せつかく尻尾で吹っ飛ばしたのにまた来たよ。そのままだったら良かったのに、つていうか速い！

「ちよつとタンマ！」

「するわけがないだろ！」

「ドラゴンウイング！」

おお！我ながらすごいな。この羽。伸ばして体を包んだらイマジンの飛び蹴り直撃しても無事だったし、広げたら逆に吹っ飛ばしたし。

「つく。ふざけた名前ばかり付けやがつて！」

「今だ！ドラゴンクロー！」

って腕が！腕がア！いや、敵のだけど。もげたア！気持ち悪い！もうヤダ！さっさと終わらせよう！帰って寝たい！尻尾でもう一度吹っ飛ばしてつと！パスくパスくよしチャージ！

「つく。テメ…エ…！」

《Full Charge & Maximum Boost》

「行くぞ？ドラゴンズ…：プレス！」

「がああああああああ！」

お約束の爆発。なんとか倒せたか。つていうか何あの必殺技？胸辺りのドラゴンの顔からビームが出たけど、それ以外にもなんか十匹ぐらいの竜が出てきて一斉掃射しているところ見てたらなんか敵が可哀想になった。清々しいまでのフルボッコ技だった

んだけど。

『あの技って……。』

「戻ろうか。何も考えるな。とりあえず無事に生きていることを喜ぼう。」

『う、うん』

「ただいま……。死ぬかと思ったあ。」

「ドラちゃんやりましたね！」

「っへ、やれば出来るじゃねえか！」

「だからいったやろ！男はみんなやるもんや！」

「モモタロス！皆も無事でよかったよ！」

アレ……なんか急に目の前が……。

「おう！良太郎！っていうかおい！破れコウモリ！お前オレのセリフを盗るんじゃねえ

！おい！聞いているのか!？」

「おい？ふう。先輩無駄だよ。」

「何がだよ？」

「立ったまま気絶してる。」

「なにイ!？」

「あ、倒れた。」

「痛っ?この羽と尻尾ホント邪魔!」

「ぐふっ!」

「……おい鼻くそ女。今の……止めだつたんじゃねえか?」

「え?ね、ねえちよつと!」

あ、なんか転生させてくれた神様と向こうの皆が見える……待って、俺もそっちへ行
くよ〜!

「戻ってきなさい!」

『良太郎。』

「ドラゴンス何か用?」

『いや……まあ、アレだ。ありがとう。』

「えーつと何が?」

『別に分からないならいい。もうデンライナーに戻る。』

「あ、待って!」

『何?』

「ドラゴンズが何を思っているのかは分からないけど……辛いなら僕たちに言って。それくらいのこととしてはしてあげられると思うから。」

『……ありがとう。』

拜啓 向こうの世界の皆様。

オレが転生したのが良いことか悪いことか分かんないけど……もう少しだけ頑張ってみようと思います。

敬具

ドラゴンズより